

中山晋平が残した富山の名曲

The musical masterpieces concerning Toyama prefecture
composed by Shinpei Nakayama

堀 江 英 一
HORIE Hidekazu

2,500曲以上とされる中山晋平の作品は、唱歌、童謡、校歌、流行歌、新民謡など多岐にわたり、県内でも、唱歌1曲、校歌1曲、新民謡5曲が残されている。それらの作品について、成立の事情を探った。その結果、成立にはさまざまな背景があり、校歌と唱歌は相馬御風との関係、新民謡は博覧会の宣伝や温泉地の振興、企業の販売促進が関係していることがわかった。

キーワード：中山晋平、相馬御風、西條八十、木島響谷、富山、唱歌、校歌、新民謡

I はじめに

中山晋平は、明治20年(1887)、長野県旧下高井郡新野村(現中野市)36番地に生まれた。同郡柏尾尋常小学校、同郡中野尋常小学校、同郡延徳尋常小学校の代用教員を経て、明治38年(1905)、東京の島村抱月の書生となり、音楽の勉強を続けた。明治45年(1912)、東京音楽学校ピアノ科を卒業、東京市浅草区千束尋常小学校の訓導となる。大正3年(1914)、抱月が創設した芸術座の第3回公演「復活」のために作曲した劇中歌〈カチューシャの唄〉によって、作曲家としてデビュー。爾来、昭和27年(1952)に65歳で死去するまで、生涯にわたって童謡、校歌、流行歌、新民謡等を2,500曲以上残したとされる。

このうち、富山県に関係した作品は、判明しているだけで7曲ある。

- ・大正6年(1917) 30歳 〈地理教育 富山新潟間鐵道唱歌 附名所案内〉(木島響谷作詞)
- ・昭和5年(1930) 43歳 〈富山スキー民謡〉(松原與史郎作詞)
- ・昭和9年(1934) 47歳 〈黒部音頭〉(西條八十作詞)
- ・昭和9年(1934) 47歳 〈宇奈月小唄〉(西條八十作詞)
- ・昭和9年(1934) 47歳 〈廣貴堂音頭〉(西條八十作詞)
- ・昭和10年(1935)頃 48歳 〈市立富山薬業学校校歌〉(相馬御風作詞)
- ・昭和25年(1950) 63歳 〈高岡音頭〉(亀岡大介作詞)

本稿では、これらの楽曲が生まれた事情をさまざまな文献から明らかにし、中山晋平が富山県に残した足跡をたどる。

II 中山晋平が残した富山の名曲

1. 〈地理教育 富山新潟間鐵道唱歌 附旅行案内〉

(1) 楽譜発見の経緯

平成 27 年 (2015) 1 月、中野市の中山晋平記念館が国立国会図書館で発見した¹。この年は、〈ゴンドラの唄〉が発表されてから 100 年の記念の年で、記念館が関係資料を調査しているなかでのことであった。作品が存在することはすでに知られており²、この時初めて楽譜が発見された。同年 3 月には、北陸新幹線が金沢まで延伸開業している。時期を同じくして富山に関する鉄道唱歌の楽譜が発見されたことに不思議な縁を感じる。

大正 6 年 (1917) の発行で、発売元は糸魚川の島道書林 (現在の島道書店と思われる)、印刷は糸魚川の池原活版所、発行は同池原商店 (発行者・池原圓平) である³。

作詞は糸魚川の^{きじまきょうこく}木島響谷 (1880~1934)。本名を^{きじまとうべ}木島藤兵衛といい、「糸魚川町 (現糸魚川市) 京屋本店 (筆者注 結納、婚礼、法事などの冠婚葬祭用品を扱い、現在も営業。糸魚川本町 8・7) の主人で、郷土史家。俳句・歌に親しみ、天津神社詩歌応答の係を担当したことがある。相馬御風が糸魚川に戻るまで、糸魚川の学術文化の第一人者であった。大正 7 年、糸魚川町史編纂副委員長 (委員長は相馬御風) に任命され、編集・執筆を担当した。糸魚川町史 (稿) 全 5 巻は昭和 6 年に一応の完成をみたが、不況と戦争のためか、頒布するまでには至らなかった。しかし、後の糸魚川市史編纂の際に重要な役割を果たした。」⁴ 御風が糸魚川に退任したのは大正 5 年 (1916) 3 月のことで、2p には「唱歌は相馬御風先生の校閲を仰ぎ曲譜は東京音楽學校出身の新進作曲家として名高き中山晋平先生の製作に係るものであります茲に録して兩先生の多大の御厚意を感謝いたします 響谷」⁵とある。

(2) 内容

楽譜は A5 版で、表紙と裏表紙を除き 40p。3p に楽譜が、4p からは歌詞が掲載されている。定価は 8 銭で、歌詞の上下には旅行案内と簡単な解説が付せられている。歌詞は 74 番まで、富山県内は 18 番までである。5 番になって初めて富山駅を出発、途中さまざまな名所旧跡に立ち寄る設定になっている。富山市内では、光嚴寺、妙國寺、大法寺、於保多神社、日枝神社、招魂社 (現護国神社)、69 連隊練兵場 (現富山大学五福キャンパス)、北代の梅林 (現存しない)、呉福 (五福) の桃園 (現存しない)、呉羽山、県内では大岩不動尊、^{がんもくざんりゅうせんじ}眼目山立山寺、魚津城跡、天神山古戦場、徳法寺、愛本橋、釣鐘温泉、黒薙温泉、小川温泉、芭蕉碑などが紹介されている。

1 『信濃毎日新聞』、平成 27 年 (2015) 1 月 30 日 (金) 付、31 面 (信州ワイド面)。

2 中村健治『「鉄道唱歌」の謎』～「鉄道唱歌&大和田建樹・三木佐助年表」(平成 25 年、2013 年 4 月 27 日、株式会社・交通新聞社) 247p には、すでにこの作品の記述がある。

3 大正 6 年 (1917) 1 月 25 日印刷、同 28 日発行。池原活版所および池原商店の住所は、新潟県西頸城郡糸魚川町大字新田 45 番地。現在も、有限会社池原印刷所として営業 (糸魚川市新鉄 1 丁目 4-5)。島道書店の住所は、糸魚川市大町 2 丁目 2-20。

4 「郷土の人物／糸魚川市」2p、<https://www.city.itoigawa.lg.jp/dd.aspx?menuid=3789>、令和 2 年 (2020) 4 月 11 日情報取得。

5 『地理教育 富山新潟間鐵道唱歌 附旅行案内』2p、大正 6 年 (1917) 1 月 25 日、糸魚川池原商店、国立国会図書館所蔵資料。

興味深いのは、北陸線の読みが歌詞楽譜共に〈ほくろくせん〉となっていることである。「陸」には確かに〈ろく〉という読みが存在するが、当時はそのように呼んでいたのであろうか。

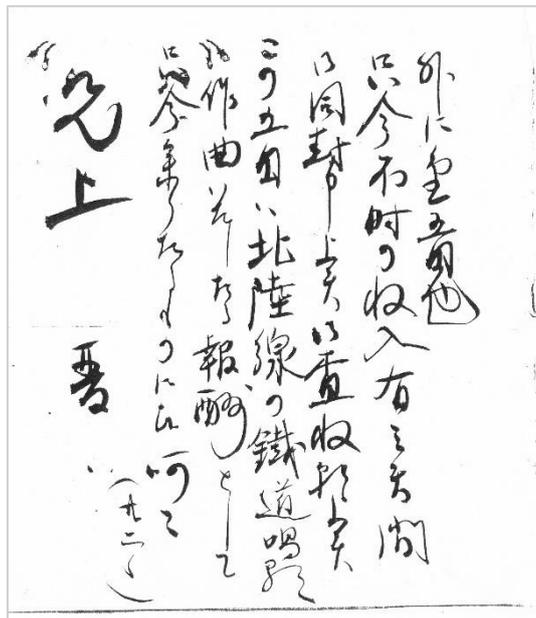
(3) 作曲の経緯考

作曲が中山晋平にどのような経緯で依頼されたのか。これには、校閲者の相馬御風と晋平との親密な間柄が関係していると思われる。

前述のように、晋平は明治38年(1905)島村抱月の書生となり、抱月の原稿の清書や、門番、来客者の取り次ぎ、抱月の子どもの面倒まで見ていた。明治39年(1906)年から御風は、抱月によって再刊された『早稲田文学』の編集者になっており、編集部は抱月の自宅であった。御風が糸魚川に退任したのは大正5年(1916)3月であるから、約10年間、2人は何度となく顔を合わせ、親しい関係になっていったものと思われる⁶。大正3年(1914)、劇中歌〈カチューシャの唄〉を抱月と共に合作し、作曲を晋平にと推薦したのも御風であった。抱月と松井須磨子の怪しい関係を最初に疑い晋平に伝えたのも御風であったらしい。それほどまでに、何でも話せる関係になり、依頼しやすかったのだと推測できる。その後も、御風作詞晋平作曲による作品が数多く生まれており、現在判明しているものだけでも、校歌59曲(うち、新潟県内は53曲、旧西頸城郡、現糸魚川市は13曲)、童謡16曲、新民謡15曲、国民歌謡2曲、団歌・社歌8曲を数える⁷。

なお、中山晋平記念館には、作曲料を送金したという兄宛ての手紙が残されている。

兄に宛てた晋平の手紙



(中山晋平記念館提供)

「外に金五円也 只今不時の収入有之候間 御同封申上候後查収願上候 この五円ハ北陸線の

⁶ 金子善八郎『相馬御風』115～116p、「相馬御風 略年譜」、平成22年(2010)11月3日、新潟日報事業社。

⁷ 糸魚川歴史民俗資料館『相馬御風～作詞曲一覧』、令和元年(2019)11月5日、糸魚川歴史民俗資料館発行のパンフレット。

鐵道唱歌に作曲いたしたる報酬として只今参りたるものに候 呵々 (二十二日) 兄上 晋」⁸

当時の晋平は、「島村家から小遣いとして毎月一円五十銭をもらっていた。そのうえ必要に迫られると、月二円の借金をさせてもらった。しかし、日常の勉学の資金には、もとより足りるものではなく、音楽学校へ通うようになってみれば月謝も学用品代も嵩むため、思案に余って郷里の長兄明孝に度々金の無心をしている。(中略)しかし郷里でも毎回は弟の無心に応えきれないで、金の工面には苦勞していたのである。」⁹ 東京音楽学校卒業時の写真を見ると、ほかの学生たちが学生服に黒靴という姿なのに対して、晋平は和服に草履といういで立ちで、制服を買うゆとりもなかったことがわかる。卒業して浅草区千束尋常小の訓導になってからも、兄にたびたび送金し、音楽学校時代の借金を返済している。

(4) 背景

北陸本線(米原～直江津)は、大正2年(1913)4月1日に全通している¹⁰。富山駅が開業したのは明治32年(1899)3月20日のことであった¹¹。信越本線の前身北越鉄道は、すでに明治37年(1904)年に直江津～新潟間が全通している¹²。

『地理教育・鐵道唱歌(第1集・東海道編)』(大和田建樹作詞、多梅稚・上真行作曲)が三木書店から発行されたのは明治33年(1900)5月10日のことであった。これが大ヒットし、9月3日には第2集・山陽・九州編(同第1集)、10月13日には第3集・奥州線・磐城線編(大和田建樹作詞、多梅若・田村虎蔵・奥好義作曲)、10月15日は第4集・北陸線(大和田建樹作詞、納所辨次郎・吉田信太作曲)、11月3日に第5集・関西参宮南海各線(大和田建樹作詞、多梅若2曲・目賀田万世吉作曲)が発行されている。以来、数多くの鐵道唱歌が生まれ、昭和14年(1939)年10月10日の『満州鐵道唱歌』(藤晃太郎作詞、古関裕而作曲)まで続く。前年には『新鐵道唱歌・直江津～金沢』(相馬御風作詞、杉山長谷雄作曲)が発行されている¹³。

こうしたブームに便乗して、糸魚川の書店が鐵道唱歌の発行を思い立ったとしても不思議はない。それなりの需要もあったと思われる。作詞は糸魚川の著名な郷土史家、校閲は糸魚川出身の著名な相馬御風、それも現在は糸魚川在住である。作曲は一世を風靡した〈カチューシャの唄〉(大正3年、1914)、〈ゴンドラの唄〉(大正6年、1916)の作曲者、中山晋平である。74番までの歌詞をもつ大作であるから、作詞に着手したのは何年も前だったと推測できる。おそらく、富山新潟間全通直後に企画されたのではないだろうか。

(5) 富山新潟間の距離、所要時間、運賃

当時富山新潟間の距離と所要時間および運賃は、どのようなものだったのだろうか。

⁸ 『中山晋平から兄に宛てた手紙』、中山晋平記念館所蔵資料。

⁹ 齊藤武雄「生い立ちの記」～町田等監修『カチューシャの唄よ、永遠に』56p、平成8年(1996)3月22日、郷土出版社。

¹⁰ 中川浩一「北陸本線の形成」～『鐵道ピクトリアル』11p、平成5年(1993)4月号、鐵道図書刊行会。

¹¹ 富山市郷土博物館企画展資料「街の中心 富山駅」、令和2年(2020)、2月22日。

¹² 瀬古龍雄「信越本線略年表」～『信越本線の100年』233p、平成11年(1999)7月18日、郷土出版社。

¹³ 中村健治『「鐵道唱歌」の謎』236～249p、「鐵道唱歌&大和田建樹、三木佐助年表」、平成25年(2013)4月27日、交通新聞社。

大正 14 年 (1925) の時刻表¹⁴を見ると、富山から直江津での円滑な接続を経て新潟に行くことができる列車は、1 日に 2 便しかない。下りは、9:49 富山発、13:58 直江津着、14:05 直江津発、15:06 新潟着、所要時間 8 時間 52 分の便と、12:40 富山発、16:48 直江津着、17:20 直江津発、22:03 新潟着、所要時間 9 時間 23 分の便である。上りは、6:40 新潟発、11:18 直江津着、11:30 直江津発、15:03 富山着、所要時間 8 時間 23 分の便と、9:30 新潟発、14:35 直江津着、14:45 直江津発、18:13 富山着、所要時間 8 時間 43 分の便である¹⁵。

富山直江津間の営業距離は 74.8 マイル、直江津新潟間の営業距離は 85.6 マイル¹⁶で、運賃は一等が 10 円 02 銭に通行税 40 銭で 10 円 42 銭、二等が 6 円 68 銭に通行税 20 銭で 6 円 88 銭、三等が 3 円 34 銭に通行税 3 銭で 3 円 37 銭である¹⁷。

現在の価格を 1 銭 80 円と仮定¹⁸すると、一等が 83,360 円、二等が 55,040 円、三等が 26,960 円となる。

現在の所要時間は、あいの風とやま鉄道と JR 信越本線を各駅停車と快速で乗り継ぐと 5 時間 15 分で、運賃は IC 優先で 4,750 円である。

したがって、当時鉄道は庶民にとってかなり贅沢な交通手段だったと推測できる。「地理教育」と銘打っているように、教育目的も兼ねていた鉄道唱歌であるが、庶民は歌詞を読んで空想の観光旅行を楽しんでいたのではないだろうか。各駅で、近くの名所旧跡に立ち寄る設定になっているのはそのような意図もあったかもしれない。

(6) この頃の晋平

大正 6 年 (1917) 前後の晋平の身辺事情は次のとおりである。

大正 4 年 (1915) 28 歳 〈ゴンドラの唄〉

- ・芸術座第 5 回公演「その前夜」劇中歌を担当
- ・母ぞう郷里で死去

大正 5 年 (1916) 29 歳 ・〈ゴンドラの唄〉楽譜出版

大正 6 年 (1917) 30 歳 〈さすらいの唄〉〈富山新潟間鉄道唱歌〉

- ・芸術座第 9 回公演「生ける屍」劇中歌を担当
- ・初めて萱間三平のペンネームを使用
- ・江南敏子と結婚

大正 7 年 (1918) 31 歳 〈森の娘〉〈緑の朝の唄〉

- ・島村抱月死去
- ・児童雑誌「赤い鳥」創刊

¹⁴ 鐵道省運輸局編纂『汽車時間表第 1 巻第 1 號 四月號』、大正 14 年 (1925) 4 月 1 日、日本旅行文化協會。

¹⁵ 前掲書、61p、117～118p。

¹⁶ 昭和 5 年 (1930) から現在の km で計算するようになったが、それまではマイルを使用していた。

¹⁷ 前掲書、219～220p。

¹⁸ 現在のコーヒー 1 杯の平均価格を 400 円として、大正 4 年 (1915) の価格が 5 銭であることによる。

- ・ 第一次世界大戦終結¹⁹
- ・ 米騒動

2. 〈富山スキー民謡〉

(1) 楽譜

楽譜は、昭和5年(1930)の『民謡音楽5月号』に掲載されている²⁰。また、昭和7年(1932)の『松原與史郎民謡集 あゆの風』には、原詩および『民謡音楽』と同一の浄書楽譜が掲載されている²¹。

作詞の松原與史郎は、明治32年(1899)富山市に生まれ、昭和52年(1977)に没した民謡詩人である。「旧制富山中学在学の時、川出麻須美から教えを受けた。『歌謡芸能』、『日本海詩人』によって活躍。昭和7年、詩謡集『あゆの風』を佐藤惣之助、藤森秀夫の序を得て上梓、集中の〈鱈の唄〉〈流鏑馬祭り〉〈越中を通る芭蕉〉など佳品。昭和12年には第二詩集『海市』を出版、民謡詩人としての業績は高い。高階作曲の〈鱈の唄〉〈滑川音頭〉〈ふるさとの唄〉²²〈富山音頭〉なども作詞している。」²³

(2) 背景

この作品が生まれた背景には、大正期の大衆登山ブームがあったと思われる。布川欣一によると、わが国で近代登山が本格化し始めたのは明治半ば、1900年前後のことであった。明治44～45年(1911～1912)、T・E・レルヒ Theodor Edler von Lerchi によってオーストリア流スキー術が伝えられ、積雪期でもスキー登山が可能になった。また、大正期になると、大正2年(1913)に一高と三高、大正3年(1914)に二高、大正4年(1915)に慶応、大正8年(1919)に学習院、大正9年(1920)に早稲田など、旧制高等学校や大学に山岳部が次々と創設された²⁴。

こうした登山ブームは、皇族にももたらされた。最初の人物は東久邇宮稔彦王で、大正5年(1916)に上高地～槍ヶ岳～大天井岳～燕岳～中房温泉を踏破している。立山には、大正8年(1919)に登攀している。朝香宮鳩彦王は、大正9年(1920)に白馬岳～燕岳～槍ヶ岳、大正10年(1921)に立山・劔岳を踏破している。スポーツの宮様として知られた秩父宮雍仁親王は、大正12年(1923)年の中房温泉～燕岳～大天井岳～槍ヶ岳～上高地を皮切りに次々と登山を行っている。なかでも、

¹⁹ 町田等監修『カチューシャの唄よ、永遠に』225～238p、平成8年(1996)3月22日、郷土出版社。

²⁰ 『民謡音楽5月号』、昭和5年(1930)年5月1日、民謡音楽発行所、国立国会図書館所蔵資料。

²¹ 松原與史郎『松原與史郎民謡集 あゆの風』、昭和7年(1932)4月20日、日本海詩人聯盟。楽譜は『富山スキー民謡』『山は母よ』(小松平五郎作曲)『富山音頭』(高階哲夫作曲)が目次の前に、原詩は38pに掲載されている。

²² 滑川市博物館編『高階哲夫の生涯』(平成8年、1996、3月5日、滑川市教育委員会)61pに、〈鱈の唄〉〈ふるさとの唄〉の自筆譜が掲載されている。

²³ 中屋一博「未来へ伝えたい薬都とやまの歌」～『薬日新聞』第4029号、臨時増刊号、令和2年(2020)1月1日。

²⁴ 布川欣一「大正登山ブームと皇族登山」～富山県[立山博物館]特別企画展図録『宮様、山へ』12p～13p、平成29年(2017)年10月21日、富山県[立山博物館]。

大正13年(1924)に行った皇族初の立山での積雪期スキー登山が有名である²⁵。この時は、芦峯寺から立山に入り、藤橋からスキーを履いて弘法小屋で一泊。翌日は室堂の測候所を基地にして雄山に登頂、浄土山を経てスキーで室堂まで滑降している²⁶。

2番の歌詞には、「スキーは光る 秩父の宮の 殿下スロープ 彌陀ヶ原」という一節がある。これは、この時の模様を謳ったものと推測できる。

登山ブームが皇族にも広まったことが、さらに大衆の登山ブームに拍車をかけたといえよう。

(3) 作曲の経緯考

楽譜の発出は、前述のように昭和5年(1930)発行の『民謡音楽5月号』である。この雑誌は、全国の民謡詩人の作品を集めたもので、富山県関係では山岸曙光が〈月夜のスキー〉²⁷を、北日本新聞社取締役社長を務めた民謡詩人中山輝が〈宇奈月スキー民謡〉²⁸を投稿している。ここからも、スキーがこの頃に盛んになっていたことが推測できる²⁹。

全国からの投稿を掲載した雑誌という性格から、出版元の民謡音楽発行所が作曲を依頼したとは考えにくい。前述の『松原與史郎民謡集 あゆの風』の後記には、松原自身による富山スキー倶楽部への謝辞、作曲者の中山晋平、小松平五郎、高階哲夫への謝辞が記されている³⁰。

松原自身がこれらの著名な作曲家へ依頼できたとは考えにくい³¹。富山スキー倶楽部あるいは出版元である日本海詩人聯盟の依頼とみた方が妥当と思われるが、推測の域を出ない。

(4) この頃の晋平

昭和5年(1930)前後の晋平の身辺事情は次のとおりである。

- 昭和3年(1928) 41歳 〈飯山小唄〉〈望月小唄〉〈マノン・レスコウの唄〉
- ・日本ビクターと専属契約
 - ・郷里の中野尋常小学校にピアノを寄贈
- 昭和4年(1929) 42歳 〈東京行進曲〉〈十日町小唄〉〈毬と殿様〉〈蛙の夜まはり〉
- ・地方新民謡を各地に旅行して作曲
 - ・〈東京行進曲〉レコード、25万枚売れる
 - ・西條八十、日本ビクター専属に
- 昭和5年(1930) 43歳 〈唐人お吉・黒船篇〉〈野沢温泉小唄〉〈富山スキー民謡〉
- ・姪、藤井梶子を養女に

²⁵ 前掲書 15p～16p。

²⁶ 前掲書 40p。

²⁷ 『民謡音楽12月号』、昭和4年(1929)12月、民謡音楽発行所、国立国会図書館所蔵資料。

²⁸ 『民謡音楽2月号』、昭和5年(1930)2月、民謡音楽発行所、国立国会図書館所蔵資料。

²⁹ この傾向はその後も続き、作曲年は不詳だが、〈大栗巣野スキーの歌〉(作詞作曲者不詳)、〈白樺スキー民謡〉(作詞作曲者不詳)、〈上滝スキー民謡〉(金山周次・中村辰行作詞、前田幸作作曲)、〈上滝スキー小唄〉(藤田吐志鳴作詞、亀谷昭月作曲)、〈上滝スキー音頭〉(丸山芳逸作詞、河西春夫作曲)、〈上滝スキーダンス〉(中村辰行作詞、尾崎近代作曲)、〈上滝スキー行進曲〉(島田芳文作詞、古関裕而作曲)などが作られている。

³⁰ 松原與史郎『松原與史郎民謡集 あゆの風』、後記7～8p、昭和7年(1932)4月20日、日本海詩人聯盟。

³¹ 小松平五郎、秋田県出身の作曲家、明治19年(1886)～昭和28年(1953)。高階哲夫、富山県滑川市出身のヴァイオリン奏者・作曲家、明治29年(1896)～昭和20年(1945)。

- ・佐藤千夜子、イタリアへ留学
- 昭和6年(1931) 44歳 〈飯坂小唄〉
- ・中野区本町通りに新居を建築
 - ・九州各地に新作発表のため旅行
 - ・東京音楽学校に作曲科設置
 - ・満州事変勃発³²

3. 〈黒部音頭〉〈宇奈月小唄〉

(1) 経緯

『追録 宇奈月町史 文化編』には、「昭和9年ころ、西条八十が当町を訪れ、風景を眺めた上、宇奈月館四番の部屋で作詩したという」³³とある。250曲以上ともいわれる中山晋平の新民謡は、大正12年(1923)の〈須坂小唄〉に始まる³⁴。晋平が新民謡を最も多く作曲したのは昭和2年(1927)から昭和5年(1930)頃にかけてで、新聞を通して人々の知るところとなり、それによって各地から作曲の依頼がきたという。昭和7年(1932)の〈丸の内音頭〉、その改作である昭和8年(1933)の〈東京音頭〉によって、全国に盆踊りのための音頭ブームが到来した。

おそらく、そうした全国的な音頭ブームに乗って、宇奈月温泉の振興を目的に依頼されたのではないだろうか。

また、西條八十夫人の母親が黒部市出身であったことから、依頼しやすかったのだと推測できる³⁵。八十が作詞した県内の校歌は、射水市立旧大門小、高岡市立国吉小、黒部市立高志野中(現清明中)、県立富山中部高等学校(富山市)、県立桜井高等学校(黒部市)である。このうち、高志野中、桜井高、国吉小は昭和33年(1958)に作詞(順に、4月、6月、6月)されており³⁶、おそらくこの関係で依頼されたものと思われる。また、この3校の作曲者はすべて佐々木すぐるである。

(2) 楽譜と音源

自筆譜や出版譜は残っていないが、かつてはSPレコードが出ていた。唄は宇奈月温泉三日月

³² 町田等監修『カチューシャの唄よ、永遠に』225～238p、平成8年(1996)3月22日、郷土出版社。

³³ 宇奈月町史追録編纂委員会『追録 宇奈月町史 文化編』193p、平成元年(1989)3月25日、宇奈月町役場。

³⁴ 山崎盈「心のふるさと——唄とロマンの舞台」～『カチューシャの唄よ、永遠に』186p、平成8年、1996、3月22日、郷土出版社)に、「これが新民謡のはじめだと思う」という晋平のことばが掲載されている。

³⁵ 西條嫩子『父・西條八十』(昭和50年、1975、4月10日、中央公論社)39pに、「大正5年、父は小川晴子と結婚した。母を追憶した『亡妻の記』に、母は小料理屋の娘と書かれているが、母の生家は現在の新橋蔵前工業会館の場所にあつて、ながく精米問屋と人力車宿、かたがた、なかなかの構えの料理屋も経営していた。(筆者注 親戚が経営していた別の洋食屋は、現在代官山にあるレストラン小川軒と思われる) 母の性格には下町娘の派手なところが微塵もなかった。母方の祖父は江戸っ子であつたが、祖母は富山県黒部の旧家の娘であつた」とある。

³⁶ 西条八十著作目録刊行委員会『西条八十著作目録・年譜』350p、昭和45年(1980)6月1日、中央公論事業出版。

旅館の芸妓、三味線は幾松、太鼓は若松であった。この音源は、昭和 61 年（1986）年 6 月 8 日に開催された「宇奈月ロータリークラブ・国際ロータリー加盟認証状伝達式」の記念品として、17 cm LP レコードとして復刻されている。

4. 〈廣貫堂音頭〉

(1) 経緯

この曲がつくられた経緯が、『広貫堂のあゆみ』に記されている。「本社は昭和 9 年、今日の時代を予見して CM ソングを制定することにし、四代社長橘文蔵のときに『広貫堂音頭』を作って、コマーシャルソングとして「広貫堂の薬」を PR することにした。この時代の広貫堂は富山県産業の代表的存在であったので、広貫堂音頭は当時のコマソングとして富山県下では元祖と呼ばれた。歌詞は配置家庭薬の信条である「先用後利」をテーマとして作詞・作曲・吹込みをし、レコードは全国の得意家へ進物用に贈るという遠大な企画であった。しかも、作詞・作曲は広貫堂にふさわしい日本の一流作家に委嘱することにし、郷土の民謡詩人山岸曙光氏の肝いりで、当時もつとも実力と人気絶頂の西条八十氏（作詞）と（故）中山晋平氏（作曲）に白羽の矢が立てられた。昭和 9 年当時、西条八十氏は読売新聞に連載物語を執筆中であったので 9 月 15 日読売の飛行機で富山歩兵第 35 聯隊の練兵場（筆者注 現富山大学五福キャンパス）に飛来し、宇奈月温泉で休養ののち、市内桜木町の料亭に泊り、翌 16 日広貫堂を視察した。当時の矢野兼三富山県知事は両氏（筆者注 西条八十と山岸曙光のこと）の招待宴を開くなどした。この民情豊かな北陸情緒も惜しみなく取りいれて、霊峯立山の英姿に親しみ、神通川の清流に無量の感慨を深めて、広貫堂音頭を作詞した。中山晋平氏は歌詞にふさわしい苦心の曲をつけ、ビクター専属の当時日本一といわれた純日本民謡歌手、三島一声氏がレコードに吹き込んだ。（中略）音頭の振付は中山晋平氏自ら担当し、広貫堂従業員に舞踊と歌唱指導を市内八人町小学校音楽室で行なった。『広貫堂音頭』は従業員は勿論、広く業界にも歌われ、ビクター蓄音機株式会社の手によってレコードに吹き込まれ、1 枚 1 円 50 銭で飛ぶように売れた。当時の歌手で最も人気のあった三島一声氏は東京音頭や桜音頭を歌い、一躍全国に名声をあげた歌手であるが、広貫堂音頭を進んで吹き込みをした。ここに奇しくも一世の詩人と作曲家、歌手が広貫堂のために顔をそろえ、天下に誇る『広貫堂音頭』が生まれたのである。日華事変勃発の前年昭和 11 年、富山県工場協会主催体育大会において、マスゲームとして広貫堂全従業員による〈広貫堂音頭〉の踊りが発表され、観衆の大喝采をあび、第 1 位優勝を獲得するなど、コマーシャルソングとして時代の先端をきって華々しい活躍をした」³⁷とある。

西条八十が富山市内にある練兵場に降り立ち、そこから現在でも各駅停車で 2 時間かかる宇奈月温泉まで行ってその日のうちに再び富山市に戻ったのは、前述のように夫人の母親が黒部市出身であることから、挨拶を兼ねて宇奈月温泉まで出向き、義母と面会したのかもしれない。

また、『唄の旅人 中山晋平』には、『信濃教育』の晋平特集号に「対談 中山さんとわたし」という西条八十の談話が載っている。それによると、昔は一つの歌を作るのに 3 回は現地へ出かけたこと。そして、おばあさん芸者や「あんまさん」等に材料を提供してもらって帰ってきて 2

³⁷ 株式会社広貫堂編集発行『広貫堂のあゆみ』110～112p、昭和 61 年（1986）6 月 1 日。

人で作る。出来上がると今度は振付師を連れて行って、土地の人たちを集めて稽古したものだという。学校からオルガンを借りてきて料理屋の座敷のまん中に置いて、まず曲を教え踊りを習わせる。そして三度目が発表会という段取りだった」³⁸とある。前述の資料にあるように、この曲も同じような段取りで作詞・作曲・振付指導が行われたのは確かである。

〈廣貫堂音頭〉のパンフレットとレコード



(廣貫堂資料館提供)

³⁸ 和田登『唄の旅人 中山晋平』153p、平成22年(2010)8月6日、岩波書店。

(2) 楽譜と音源

楽譜は、自筆譜が中山晋平記念館に、広貫堂発行のパンフレットに掲載されたものが富山市の広貫堂資料館に所蔵されている。

音源は、ほとんど未使用状態の SP レコードと復刻 CD を広貫堂資料館が所蔵している。また、中山晋平記念館も SP レコードと復刻音源を所蔵している。

5. 〈市立富山薬業学校校歌〉

(1) 2校あった市立富山薬業学校

楽譜は、中山晋平記念館が所蔵しており、寄贈した高木良一氏の手紙が添えられている。

「富山薬学教育発祥の地」記念碑（富山市梅沢町）



富山薬学専門学校記念碑（富山市奥田寿町）



手紙には「市立富山薬業学校は昭和2年の開校です。富山市生れの安田善次郎翁（安田銀行、

現富士銀行の創始者で東大安田講堂等を寄贈された人)により創立した学校です。五年制でした。私し(ママ)は、昭和十年四月入学し十五年三月卒業の第十一回生です。所在地は富山市西中野町です。現在(株)廣貫堂(賣薬生産県内第一位)の東側に跡地は市民公園となっています³⁹とある。

市立富山薬業学校の歴史をたどると、まず明治27年(1894)に、共立富山薬学校が開校している。場所は、富山市梅沢町の広貫堂の道路を挟んだ北向かいで、現在その地には記念碑があり、「富山薬学教育発祥の地」と刻印されている。これは、昭和40年(1965)、富山大学薬学部創立75周年を記念して、富山市奥田寿町に存在した旧富山薬学専門学校の門柱を用いたものである。

その後、明治30年(1897)に市立に移管され、富山市立薬学校となった。ところが、明治32年(1899)8月12日に、富山市西中野町で出火があり、薬学校の校舎も類焼してしまった。校舎新築の目途が立たず、翌年富山市議会が廃校を決議した。

しかし、有志による存続運動が展開された結果、富山市立薬業学校として新たに開校が決議された。

明治40年(1907)に県立への移管が決議され、翌年校舎を富山市総曲輪の日赤病院跡地(現富山市民プラザ)に建設することが可決された。

明治42年(1909)、文部省が富山市に県立の薬学専門学校を設置することを決定し、富山県立薬学専門学校となった。校舎も富山市奥田町に移転した。現在その跡地は公園となっており、記念碑がある。

この学校は、昭和24年(1949)に富山大学に吸収され薬学部となり、その後昭和50年(1975)に富山医科薬科大学に吸収され、平成17年(2005)に国立大学法人富山大学薬学部となった。

さきの高木良一氏の手紙では、市立富山薬業学校の創立は昭和2年(1926)とある。しかし、富山大学へとつながる市立富山薬業学校が開校したのが明治32年(1899)、明治40年(1907)に県立へ移管しているので、校歌はこの間につくられたはずである。年代的にまったく合わないことになる。

また、開校した明治32年(1899)は、中山晋平12歳、下高井郡立町村立下高井高等小学校1年で、学費が払えずに退学、小諸町大和屋呉服店に丁稚奉公に出た年である。晋平が上京して島村抱月の書生になったのが明治38年(1906)で、18歳の時であった。相馬御風が抱月宅に編集部を置いていた『早稲田文学』の編集に携わったのは明治39年(1907)で、おそらくこの時に出会いがあったはずである。したがって、校歌がつくられたとすればおそらく明治39年(1907)、県立へと移管する直前だったと推測できる。であるならば、まだ〈カチューシャの唄〉も世に出ていない最も初期の頃の作品ということになるが、およそ現実的ではない。

さまざまな関係資料を調査すると、市立富山薬業学校が2校あったことがわかった。

『富山県薬業史 通史』には、共立富山薬業学校、市立富山薬業学校、県立富山薬業専門学校という流れの一方で、中堅の売薬業者の養成が求められ、小・中学校に薬業科の設置が進められると共に、富山市立薬業学校の設立も進められたという経緯が記されている。長くなるが引用する。

「大正15年2月に、富山売薬行商会幹事の井上清三郎、野上松太郎、広瀬重造が、富山通常市

³⁹ 中山晋平記念館に宛てた当時72歳だった高木良一氏の手紙、平成6年(1994)7月16日。

会開会中の牧野市長と金山市議会議長に宛て、薬業学校の設立の請願書を提出した。その要旨は、本県売薬は重要産業であり、その向上進展は地域経済、財源の膨張になるが、現状は他の商工業にくらべて設備、施設は誠にもの足りない。市当局は近年、商工補習学校に新たに薬学科を設け、薬学に対する知識を授け、業者の養成に尽しているが設備制度は不十分であって、入学者も少い。また講習会等多少の奨励補助の設備もあるが、実際効果は甚だ覚束ない。この際商工補習学校の薬学科を拡大し、独立させて一日も早く業者養成機関として薬業学校を独立させたいと本会の決議により請願書を提出した。(中略) こうして、昭和2年4月1日に、富山市立薬業学校が開校となり、市内の柳町尋常小学校の一部において発足した。なお同校は昭和8年4月14日、職業学校規定により、市立富山薬業学校と改称され、昭和20年4月1日より富山市立化学工業学校と名称を変更した。」⁴⁰ 現在は、県立富山北部高等学校になっている。さきの高木良一氏の手紙で述べられている、西中野の廣貫堂敷地内に移転したのは、昭和10年(1935)のことであり⁴¹、高木氏は新築なった校舎で初めて学んだ生徒になる。

以上の経緯から、この校歌は昭和2年(1926)開校の市立富山薬業学校の校歌であると結論づけられる。

また、さきの高木良一氏の手紙には続きがあり、「別紙小生の母校の校歌、市立富山薬業学校、1935年の作と思います」⁴²とある。

したがってこの校歌は、新校舎落成を記念してつくられたのではないだろうか。

市立富山薬業学校跡地



⁴⁰ 『富山県薬業史 通史』749p、昭和62年(1987)3月31日、富山県。

⁴¹ 株式会社広貫堂『広貫堂のあゆみ』78p、昭和41年(1966)9月1日、広貫堂。

⁴² 高木良一氏から中山晋平記念館に宛てた平成6年(1994)7月16日付の手紙、中山晋平記念館所蔵。

(2) 相馬御風と富山

相馬御風は、校歌を多数作詞している。最も多いのは新潟県で、144校を数える。次いで多いのは富山県で、17校である⁴³。蛭子健治は、御風と交流があった主な人物として、郷倉千靱、須垣久作、豊秋半次、米澤元健の名を挙げている⁴⁴。蛭子によると、富山県を代表する日本画家、郷倉千靱は、画家志望だった御風の三男 皓^{あきら}に自身の師安田靱彦^{ゆきひこ}を紹介した。現在のスガキ印刷株式会社の前身の紙屋を営んでいた須垣久作は、戦時中雑誌発行のための用紙不足で困っていた御風に印刷用紙を提供した。画家志望だった豊秋半次は、御風の紹介で安田靱彦の書生となり、後に画家として大成する。米澤元健は、富山県が石川県から独立した際、推進者だった衆議院議員米澤紋三郎の三男で、入善町町長、富山県議会議長、富山県教育会長などを歴任し、県教育会主催の講演会に御風を招いている。

市立富山薬業学校の校歌を作詞した頃の御風の身辺事情は次のとおりである。

昭和 7 年 (1932) 49 歳 妻テルを御風自身の誕生日 7 月 10 日に亡くす。

昭和 8 年 (1933) 50 歳 『馬鹿一百人』『西行さま』『人間・世間・自然』出版

昭和 9 年 (1934) 51 歳 『砂に坐して語る』『日のさす方へ』『一人想ふ』出版

昭和 10 年 (1935) 52 歳 『良寛百考』『続良寛さま』『道限りなし』出版⁴⁵

〈市立富山薬業学校校歌〉？

また、この頃の晋平の身辺事情は次のとおりである。

昭和 7 年 (1932) 45 歳 〈丸の内音頭〉(翌年の〈東京音頭〉の元歌)〈銀座の柳〉

昭和 8 年 (1933) 46 歳 〈東京音頭〉

- ・箱根に夏の家を建設
- ・国際連盟脱退
- ・皇太子生誕 (現今上上皇)

昭和 9 年 (1934) 47 歳 〈軽井沢音頭〉〈黒部音頭〉〈宇奈月小唄〉〈廣貫堂音頭〉

- ・竹久夢二死去
- ・坪内逍遙死去

昭和 10 年 (1935) 48 歳 〈湯田中節〉〈母恋し〉〈市立富山薬業学校校歌〉？

- ・熱海に夏の家を建設
- ・作曲家生活 20 周年記念音楽会
- ・西條八十、日本ビクターからコロムビアに移籍⁴⁶

御風と晋平とのつながりは深く、新潟県内では校歌も中山晋平作曲のものが多い。

ところが、富山県内の校歌に関しては、この組み合わせは市立富山薬業学校だけである。ほか

⁴³ 『相馬御風～作詞曲一覧』、令和元年 (2019) 11 月 5 日、糸魚川歴史民俗資料館発行のパンフレット資料。

⁴⁴ 蛭子健治「御風と富山、『相馬御風の交流と業績の覚書』73～75p、令和元年 (2019) 9 月 10 日、蛭子健治。

⁴⁵ 金子善八郎『相馬御風』115～116p、「相馬御風 略年譜」、平成 22 年 (2010) 11 月 3 日、新潟日報事業社。

⁴⁶ 町田等監修『カチューシャの唄よ、永遠に』225～238p、平成 8 年 (1996) 3 月 22 日、郷土出版社。

の作曲者は、福井直秋（小杉農業学校・現小杉高 1923 年）、小松耕輔（旧制富山高・現富山大人文学部、1924 年）、梁田貞（高岡商業学校・現高岡商業高、1928 年）、弘田龍太郎（高岡高等商業学校・現富山大経済学部、1928 年、新湊高等女学校・現新湊高、1940 年）、片山颯太郎（婦負農学校・現富山西高、1930 年）、岡野貞一（旧制高岡中学・現高岡高、1933 年）、乗杉嘉寿^{よしひき}（魚津実業学校・現魚津高、1939 年）、信時潔（新湊国民学校・現新湊小、1946 年）、小林礼（富山薬学専門学校・現富山大薬学部、制定年不詳）、山田耕筈（市立富山工業学校・現富山工業高、制定年不詳）である。岡野貞一、信時潔、弘田龍太郎、片山颯太郎は、東京音楽学校の教授で、校長の乗杉嘉寿は富山県砺波市出町出身であった。在任期間は、昭和 3 年（1928）4 月 24 日から昭和 20 年（1945）10 月 15 日までである。この間に東京音楽学校の教員または学生だった作曲家は、弘田龍太郎（教員）、片山颯太郎（学生）、信時潔（教員）、岡野貞一（教員）である。乗杉による作曲の指示あるいは紹介があったことは考えられる。また、福井直秋は富山県上市町の出身で、後に武蔵野音楽大学を設立した人物で、県内の校歌を多数作曲している。

したがって、このような事情で中山晋平に依頼する機会がなかったのかもしれない。

6. 〈高岡音頭〉

(1) 経緯

昭和 26 年（1951）4 月 5 日から 5 月 25 日まで、高岡市古城公園を舞台に、高岡産業博覧会が開催された。多くのパビリオンが建設され、動物園新設のためにさまざまな動物が購入された。そのなかには、象 1 頭も含まれていた。価格は 90 万円であった。

博覧会に併せて、昭和 25 年（1950）年 5 月 23 日、高岡音頭、高岡小唄の歌詞が公募された。その経緯が、『高岡産業博覧会会誌』に記されている⁴⁷。これによると、締切は、同年 6 月末日であった。賞金は、1 等 5,000 円、2 等 3,000 円、佳作 1,000 円であった。締切日までの応募者は、高岡音頭 62 人、高岡小唄 51 人で、当選者は以下の通りである。

高岡音頭

- | | | |
|-----|--------------|-----------------------------|
| 1 等 | 石川県鳳至郡門前町高清水 | 亀岡大介（佐伯孝夫 ⁴⁸ 補作） |
| 2 等 | 高岡市袋町 | 中島良男 |
| 佳作 | 石川県根上濁池 | 加賀道子 |

高岡小唄

- | | | |
|-----|--------|--------------|
| 1 等 | 高岡市仲町 | 武羅佳咲（佐伯孝夫補作） |
| 2 等 | 高岡市利屋町 | 葉志 駿 |
| 佳作 | 富山市梅沢町 | 寺津幸司 |

高岡音頭は、日本ビクター専属だった中山晋平が作曲し、芸妓市丸が吹き込みを行った。高岡小唄は、日本ビクター専属だった東辰三が作曲し、日本ビクター専属の榎本美佐江が吹き込みを行った。レコードは 1,000 枚が製作され、11 月 7 日に高岡に到着、東京、名古屋、富山の放送局、新聞社 11 社、放送宣伝社 2 社、および県内近県の国鉄、地方鉄道の駅で拡声器を有する駅、各市

⁴⁷ 『高岡産業博覧会会誌』265～270p、昭和 27 年（1952）年 12 月 15 日、同事務局。

⁴⁸ 日本ビクター専属。

町村、協賛団体、各種文化団体に送られた。残りの約半数は富山県蓄音機商組合が廉価で販売した。

昭和 25 年（1950）12 月 13 日には、第一劇場にて、高岡蓄音機組合主催、高岡産業博覧会後援で、発表会が行われている。

歌手 日本ビクター専属 榎本美佐江 西村正美

編曲およびアコーディオン 小沢直与志

特別出演 高岡桐木町芸妓連中

伴奏 楽団エスクワイヤ

(2) 加賀道子考

佳作に入選した石川県根上町の加賀道子であるが、この人物は、全国高等学校野球選手権大会の歌〈栄冠は君に輝く〉の作詞者、加賀大介夫人もしくは大介本人の可能性が高い。

〈栄冠は君に輝く〉は、昭和 23 年（1948）の学制改革に伴い、「全国中等学校優勝野球大会」から「全国高等学校野球選手権大会」に改称され、この大会が 30 回の記念大会であったことから、朝日新聞社が全国から歌詞を募集した。「当初は、高橋道子（結婚後は中村道子）となっていたが、これはプロの文筆家で地元・石川で（筆者注 根上町）執筆活動をしていた加賀大介（当時の本名・中村義雄）が、周囲から懸賞金（大賞賞金は 5 万円で、当時の公務員の平均給与の 10 倍以上であった）目当てと思われるのを嫌い、自分の名を伏せて婚約者の名前で応募したためであり、第 50 回記念大会（1968 年）を機に加賀本人が作詞の真相を語り「加賀大介作詞」と改められた。」⁴⁹

『ああ栄冠は君に輝く』によると、〈栄冠は君に輝く〉の歌詞が大賞を受賞した後も、「大介は公募作品にせさせと応じている。（中略）新聞に掲載される全国規模の公募記事や、ラジオの情報や広告などはどんな小さなものでもこまめに見つけ出して、可能な限り応募し続けた」⁵⁰という。また『「加賀大介」という名はあくまで、純文学のときに限るという大介自身の信念のようなものもあったのである」⁵¹とある。このことから、加賀道子は加賀大介夫人もしくは、〈栄冠は君に輝く〉の場合と同様に、加賀大介本人の可能性が考えられる。

(3) 楽譜と音源

楽譜は、前述の会誌 267～268p に掲載されている。また自筆譜と音源は、中山晋平記念館が所蔵している。

その後この作品は、毎年高岡の末広町の通りを中心に開催されている「高岡七夕まつり」で、大勢の市民によって踊られるようになった。

(4) この頃の晋平

昭和 25 年（1950）前後の晋平の身辺事情は次のとおりである。

昭和 23 年（1948）61 歳 ・日本音楽著作権協会会長就任

昭和 24 年（1949）62 歳 〈新平和音頭〉

・児童向け雑誌「幼稚園」に童謡を掲載し始める

昭和 25 年（1950）63 歳 〈家城おどり〉〈高岡音頭〉

⁴⁹ ウィキペディア「栄冠は君に輝く」、<https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E6%A0...>、令和 2 年（2020）6 月 5 日情報取得。

⁵⁰ 手束仁『ああ栄冠は君に輝く』107p、平成 27 年（2015）7 月 22 日、双葉社。

⁵¹ 前掲書、107p。

- ・熱海市大火、晋平宅は無事
- 昭和 26 年（1951） 64 歳 〈お諏訪節〉
 - ・日米安保条約調印
- 昭和 27 年（1952） 65 歳 〈みんな楽しく輪になって〉〈浅草区千束小校歌〉（東京での最初の勤務校）
 - ・第 2 回 NHK 紅白歌合戦審査委員長
 - ・映画「生きる」鑑賞
 - ・東京で発病、熱海で加療
 - ・国立熱海病院で膵臓炎のため死去⁵²

Ⅲ 終わりに

中山晋平が残した富山県に関する作品について、成立の経緯等を明らかにすることができ、嬉しい気持ちでいる。

しかし、これだけの作品数がありながら、今日の富山県ではまったく忘れ去られていることが残念である。楽譜も音源も、まったく入手できない状態である。これらの作品をまとめた楽譜集や音源集を世に出せないものだろうか。

これは、統合されたり廃校になってしまったりした県内の校歌、県民愛唱歌、各市町村歌にも見られる。これらの作品も楽譜集や音源集にして世に出せないものだろうか。

楽譜や音源は、失われてしまっただけからでは遅く、わたしたちはこのような文化遺産を後世にまで伝えていく義務を負っている。

その意味でも、成立の経緯、楽譜を掲載できたことは大いに意味があったと感じている⁵³。

これらの作品は、晋平のデビュー作となった〈カチューシャの唄〉〈ゴンドラの唄〉と同じ時期の〈富山新潟間鉄道唱歌〉、爆発的なヒットになった〈東京行進曲〉の翌年につくられた〈富山スキー民謡〉、〈東京音頭〉に始まる全国的な盆踊りブームに乗り数多くの新民謡が生まれた時期の〈黒部音頭〉〈宇奈月小唄〉〈廣貫堂音頭〉、亡くなる 2 年前の〈高岡音頭〉と、晋平の生涯の節目節目をほぼたどるように生み出されている。亡くなる年には、東京音楽学校を卒業して最初に勤務した浅草区千束小の校歌を作曲し、〈ゴンドラの唄〉が最終場面で志村喬扮する市役所の職員によって歌われる映画「生きる」を 12 月にお忍びで鑑賞し、翌日発病して年末に亡くなっている。

これらの作品を後々まで伝えていきたい。

なお、本稿執筆に際し、中野市の中山晋平記念館、富山市の広貫堂資料館、宇奈月町の上野玉樹氏には、貴重な資料を快く提供いただいた。中山晋平記念館の青木和美館長はじめ職員の方々には、中山晋平に関して多方面にわたる貴重なご助言をいただいた。また、相馬御風記念館の金子善八郎氏には、島村抱月宅での相馬御風と中山晋平の関係について示唆に富んだご助言と、〈富山新潟間鉄道唱歌〉の作詞者・木島響谷について、さまざまなご教示をいただいた。深く感謝申し上げます。

⁵² 町田等監修『カチューシャの唄よ、永遠に』225～238p、平成 8 年（1996）3 月 22 日、郷土出版社。

⁵³ hp では、音楽著作権料の関係で楽譜は非公開。

IV 参考・引用文献

- ・『地理教育 富山新潟間鐵道唱歌 附旅行案内』、大正 6 年（1917）1 月 25 日、糸魚川池原商店、国立国会図書館所蔵資料。
- ・鐵道省運輸局編纂『汽車時間表第 1 巻第 1 號 四月號』、大正 14 年（1925）4 月 1 日、日本旅行文化協會。
- ・『民謡音楽 12 月号』、昭和 4 年（1929）12 月、民謡音楽發行所、国立国会図書館所蔵資料。
- ・『民謡音楽 2 月号』、昭和 5 年（1930）2 月、民謡音楽發行所、国立国会図書館所蔵資料。
- ・『北陸線の記録』、昭和 5 年（1930）、金沢金沢鐵道管理局。
- ・『民謡音楽 5 月号』、昭和 5 年（1930）年 5 月 1 日、民謡音楽發行所、国立国会図書館所蔵資料。
- ・松原與史郎『松原與史郎民謡集 あゆの風』、昭和 7 年（1932）4 月 20 日、日本海詩人聯盟。
- ・『高岡産業博覧会会誌』、昭和 27 年（1952）年 12 月 15 日、同事務局。
- ・広貫堂『広貫堂のあゆみ』、昭和 41 年（1966）6 月 1 日、広貫堂。
- ・富山市『富山市史年表』、昭和 41 年（1966）12 月 20 日、富山市役所。
- ・西条八十著作目録刊行委員会『西条八十著作目録・年譜』、昭和 45 年（1980）6 月 1 日、中央公論事業出版。
- ・西條嫩子『父・西條八十』、昭和 50 年（1975）4 月 10 日、中央公論社。
- ・富山県『富山県薬業史 資料集成下』、昭和 58 年（1983）5 月 9 日、富山県。
- ・『富山県薬業史 通史』、昭和 62 年（1987）3 月 31 日、富山県。
- ・宇奈月町史追録編纂委員会『追録 宇奈月町史 文化編』、平成元年（1989）3 月 25 日、宇奈月町役場。
- ・『鉄道ピクトリアル』、平成 5 年（1993）4 月号、鉄道図書刊行会。
- ・糸魚川市歴史民俗資料館『相馬御風作詞目録稿』、平成 6 年（1994）3 月 1 日、糸魚川市教育委員会。
- ・滑川市博物館編『高階哲夫の生涯』、平成 8 年（1996）3 月 5 日、滑川市教育委員会。
- ・町田等監修『カチューシャの唄よ、永遠に』、平成 8 年（1996）3 月 22 日、郷土出版社。
- ・『信越本線の 100 年』、平成 11 年（1999）7 月 18 日、郷土出版社。
- ・富山大学年史編纂委員会『富山大学五十年史』、平成 14 年（2002）10 月、富山大学。
- ・和田登『唄の旅人 中山晋平』、平成 22 年（2010）8 月 6 日、岩波書店。
- ・金子善八郎『相馬御風』、平成 22 年（2010）11 月 3 日、新潟日報事業社。
- ・中村健治『「鉄道唱歌」の謎』、平成 25 年（2013）4 月 27 日、交通新聞社。
- ・『信濃毎日新聞』、平成 27 年（2015）1 月 30 日（金）付。
- ・手束仁『ああ栄冠は君に輝く』、平成 27 年（2015）7 月 22 日、双葉社。
- ・『相馬御風略年譜』、平成 29 年（2017）年 2 月 7 日、相馬御風記念館。
- ・富山県 [立山博物館] 特別企画展図録『宮様、山へ』、平成 29 年（2017）10 月 21 日、富山県 [立山博物館]。
- ・『相馬御風～作詞曲一覧』、平成 30 年（2018）10 月 6 日、糸魚川市歴史民俗資料館発行のパンフレット資料。
- ・蛭子健治『相馬御風の交流と業績の覚書』、令和元年（2019）9 月 10 日、蛭子健治。
- ・糸魚川歴史民俗資料館『相馬御風～作詞曲一覧』、令和元年（2019）11 月 5 日、糸魚川歴史民俗資料館。
- ・中屋一博「未来へ伝えたい薬都とやまの歌」、『薬日新聞』第 4029 号、臨時増刊号、令和 2 年（2020）1 月 1 日。
- ・富山市郷土博物館企画展資料「街の中心 富山駅」、令和 2 年（2020）、2 月 22 日。
- ・「郷土の人物／糸魚川市」2p、<https://www.city.itoigawa.lg.jp/dd.aspx?menuid=3789>、令和 2 年（2020）4 月 11 日情報取得。
- ・ウィキペディア「栄冠は君に輝く」、<https://ja.m.wikipedia.org/wiki%E6%A0...>、令和 2 年（2020）6 月 5 日情報取得。